
カナデシキ。

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナデシキ。

【Nコード】

N6558J

【作者名】

そら

【あらすじ】

妄想好き主人公「志稀」（シキ）は何のヘンテツもないただの男子高校生。しかし、偶然宇宙外な存在の女の子「奏」（カナデ）と出会うことにより、生活は一転する。

冷徹天使や世話好き天女、その他諸々やこしい人たちに囲まれて、志稀は一刻も早く平穏な日常を取り戻すことを心に誓うのだった――。

女の子と日々の生活を通じて恋愛を育んでいく、というヌルい展開

のラブコメを望む主人公の期待を裏切る話。

第1章：妄想から目が覚めて

「志稀くん……ごめん、私、やっぱり星に帰らなくちゃいけないの……」

「そんな……どうして。あの『思い出の丘』で約束しただろ！？
俺は、一生お前を守るって……」

「だけど、私が今帰らなくちゃ、星がめっちゃくちゃになっちゃうの……。私がやらないと、駄目なの」

がしっ！！

「志稀くん！？　ちょ、苦し……」

「俺はお前を離さないっ！　お前が星に帰るんだったら、俺も一緒に連れて行ってくれっ！！」

「でも、もう地球に帰って来られないかもしれないんだよっ！？
ここには、志稀くんを大切に思ってくれている人がたくさんいるんだよっ！？」

「じゃあ、お前の星には、お前を大切に思ってくれる人はいるのか？」

「……」

「だったら、俺がずっとお前のそばに居てやるから。お前の星で、俺がお前を守ってやるから……」

「志稀、くん」

「今まで辛い思いをさせて、ごめんな……。もう、お前に悲しみの涙なんか、流させやしないから…」

出典…『俺の妄想ノート』『エンディングその8』※一部に抜粋を含みます。

無駄に燦々と輝く太陽。ひばりのつがいがぴゃーぴゃー騒いでいる。

五月下旬。晴れ。

ゴールデンウィークも終わり、ただでさえ五月病真っ只中の連中に、追い打ちがかかる時期。梅雨入りと同時に、期末考査と称したヒエラルキーが再構築される。

高校に入学したての、夢と希望に満ち溢れた奴らだって、「連休明け」という敵に大ダメージをくらってやがるのに、「モチベーション」ステータスが去年よりダダ下がりの俺ら高校二年生は、誰がその強大な敵に立ち向かえるというのであろうか。まあそんな中でも期末に向けて着々と準備を進めている少数派も居ないことはないわけだが、そんな奴らはもう既に三角形のてっぺんで愚民どもを見下しているのであって、今更形成された勢力図を塗り替えようとするマニアックな奴はさすがにいない。

当然俺も、既に「中の下」ぐらいの位置に組み込まれ、向上心を持つわけでもなく、また下の勢力を脅威に思うわけでもなく、あまり持ち続けても意味がない位置をキープし続けていた。しかしながら開き直って「なにもしない」という行動にも、小心者という性格からか選択はできない。RPGなどの戦闘で、ターンが周ってきてもお前じゃ敵は倒せないって言うときに、無難に防御などを選択せずにとりあえず殴っておく、とかいうパターンだ。またはシュミレーションで、あと一日余ってるんだけど行動すると次の日の体力とかがヤバいから、何もせずに終了したいんだけどなんだかもったいないから無駄に行動して失敗する、とかいうパターンとも言える。

まあ長ったらしく書いたが、俺はそういう人間なので。とりあえず試験直前までダラダラしておこうと、この春の陽気を全身で享受する体制に入った。

ということで冒頭のぶっとんだ話が脳内で繰り広げられたわけであるのだが。

「はあ……」

五限終了のチャイムと同時に、俺はため息をついた。

英語教師が、のんきに「See you next week.」なんて言っている。

夢の世界から現実に戻ってくる時が一番苦痛を伴って仕方がない。若干の羞恥心とともに、数時間前から何も成長を遂げていない自分を直視せざるを得ないからだ。他の奴らは、その間さすがに単語の一つや二つでも覚えただろう。

時計を見ると、針は二時過ぎを指していた。

「しーくん、なーにぼんやりしてるんですかぁ？」

日常に起きてる事なんて、何も面白くなんでない。

たとえばこんな風に、つまらない隣人の相手をする事のように。こいつの話を聞くぐらいなら、円周率の暗記や机の木目を数えている方がまだマシだ。有益な話なんか、こいつと交わした覚えはない。

「お前はいつも楽しそうで、いいよなあ」

「なに、どしたの？ 哲学でも考えちゃってる？ そんな非現実よりさー、俺たちに実際に迫っている現実を直視しようぜー」

隣のバカ（又の名を小林太郎と言う、何のひねりもない野郎）は、ごそごそと机から数学のノートを取り出し、真っ白なページを広げと言う。こいつのノートに、俺はあらかじめ字が書いてあったという記憶はない。

「今日も頼みますよお、シキ大納言様あ」

大納言がどのような位かも分からずに適当に乱用しながら、小林は両手を合わせ頭上で拝む。これ以上つまらない頼みを聞いてもらえないので、俺は机からノートを取り出し、隣に放った。小林は砂糖に群がるありのように、すぐさまノートを掻っ攫う。

「ははあ、ありがたやありがたや」

こんな、俺より絶対適当に生きてそうな奴の方が、俺より人生を謳歌しているようにみえる。いや、それは考え違いなのかもしれない。真面目に生きている人間だけが、決まりきった日常をなぞるだけの生活にうんざりしているのだろうか。

しかし、小林が得だとか、真面目が損とか、ぶっちゃけそんなことはどうでもいい。俺は真面目ではない方だしな。

まあ何というか、俺は日々の生活に「飽き」を感じずには居られなかった。

「お腹と背中がくつつくぐらい、面白いこと、ねえかなあ」
「しーくん、腹減ってるの？ さっき食ったばかりじゃん」

俺は、胃の底から出たような深いため息をつき、五月の無駄に晴れ晴れとした青空を見やった。

そんな、俺のくだらない願い。

夢見がちな少年少女が、描きそうな空想。

しかし、天の神様は気が狂ったのか。

何の変哲もない男子高校生の、そのちっぽけな願いは、あろうことか実現していただける羽目となる。

それがよかったのか悪かったのかは、後の俺に聞いてくれ。

それから、幾日かが過ぎた。

俺は、いつものように妄想をし、いつものように無駄な日常を嘆いていた。

その日も、天気はよかったなあ。

学校がひけて、ぼーっとしながら空を見て歩いていた。

と。

上空に光る何物かを発見した俺。

太陽のきらめきか、と目をしばたいて再びその方向を見やる。

いや、確かにそれは、きらめきなどではない他の何かなのは間違いない。それは不自然に瞬き、未確認飛行物体のように右往左往している。

この時期、しかもこの大都市の真ん中で蛍か、いやいやさすがにあんなに強い光は出さぬ、などと、俺の中で考えられる全ての事象と現在の状況を照らし合わせること幾分。

その光は突然方向を見定め、俺に近づいてきた。

と、近づくにつれてその光が徐々に大きさを増す。

「ちょ、……おいおいっ!!!!」

ズガン!!

俺が後一步、その足を踏み出していたものなら、あまり未練はないといってもやはり悔いは残るであろうこの世との別れを告げていたであろう。その謎の光る物体は、俺の目の前にクレーターをつけるほどの勢いで着陸した。

「な……なんだっ!!?」

こんなSFみたいな状況で冷静になれるほど、俺の神経は麻痺していない。ただただ、目の前に落ちてきやがった謎の物体を凝視するだけだった。すると、それは徐々に光を失い、その形状をあらわにし始めた。

それが何だったと思う？

少しは想像力に富んでいるだろうと自負している俺にも全く見当
つかなかったぜ。

コンクリを粉砕するほどの破壊力で落ちてきたのにもかかわらず、

それは、羽の生えた少女だったんだよ。

第2章：羽少女

「あ、あの……」

危険な奴かもしれない。そんなことは頭から吹っ飛んでいた。ただ、こいつが何者なのかを知りたい、その一心で声をかけた。しかし、謎の羽少女は、何事もなかったかのようにすくと立ち上がり、あたりを見回した。その目には俺が映っていないのだろうか。完璧に無視された感じが俺に残る。

その後何度も何度も俺は呼びかけた。しかし一向に返事がくることはない。俺は仕舞いには強引に、少女の肩をつかみ言った。

「なあ、おいっ!!」

「!!?」

少女は初めて俺の存在に気がついたかのように、丸い目をさらに大きくさせて将に飛び上がるほど驚いた。この反応に呼びかけた俺の側も驚いちゃうほど。

「な、なななな!!!! ど、どういことっ!!!!?」

少女は咄嗟に俺から一定の距離をとった。ありえない、訳が分からない、という言葉を連呼し、動揺を隠せないようだった。しかし、声をかけた俺の方がこの状況を理解できない。

「なあお前、何なんだっ!!? 宇宙人かっ!!?」

少女は俺の言葉は無視し、なおも動揺中である。ぶつぶつと訳の分からぬ事をひとりごち、頭を抱えたりそこらへんを歩き回ったりしている。俺はただそれを黙って見ているしかできなかった。

と、その時。

ギシャアアッ!!

「!?!?」

少女の背後で空間が黒く渦巻き、その中から血に飢えた獣のような鳴き声が聞えてきた。

そんな視覚的、聴覚的エフェクトで、この中からヤバイ奴がでてこない訳がない。

案の定、（というか、このときの俺がこんな冷静な分析をしていられるはずはないが）そこからは見るからにモンスターですよと言わんばかりの輩がでてきやがった。俺はもう、それを凝視するのみ。「っ! こんな時に限って!!」

少女は狼モンスターに対峙した。そして、どっから出したのか全く分からないが、手にはいつの間にか武器とおぼしき杖を持っていた。それで少女は戦うかと思いきや。

「これっ!」

「え、ええっ!?!?」

少女はあろうことか、何の関係もなからうと思われる、また戦闘能力ゼロであろうこの俺に、その杖をよこした。いきなりのバックパスに思わず落としかけるぐらいだ。

「とりあえず、自分の身は自分で守って!!」

「ちょ、ちよっと!! どうやって——」

使うのかという言葉を発する前に、少女は空高く舞い上がった。

第3章…チュートリアルはありません。

少女は白い羽をいっぱいに広げ、空高く舞い上がる。狼モンスターはそれを追いかけるように、自分も空中に駆け上がった。少女の手には、銀色に輝く切っ先を持つ、長く鋭い槍があった。

「こっちにだって用事ってものがあるのよ！　ちゃっちゃと終わらせてもらうからね！」

と、言うが早いか、少女は矛先を既にモンスターに向け、攻撃を仕掛けていた。あまりのスピードに、少女が瞬間移動したのかと思えるぐらいだった。鈍い咆哮とどす黒いガスが、モンスターから噴出する。

あっけなくそれは倒されたと思いきや、いつの間に仲間を呼んだか、辺りには同じような輩が空中にいくつも浮かんでいた。少女はためらいもなく次々と槍を駆使していく。少女の飛び回る空には、白い羽が雪のように舞う。銀の煌きと白い羽の中、それはまさに「天使」の姿であった。

「ちよっと！　何よそ見してるの！？　前、まえっ！！」

少女の甲高い声に、俺はやっと現実に戻ってきた。と同時に、すぐに目の前の状況に思考回路が止まってしまった。

「な、……！！？」

俺の目の前には、狼が群れを成して獲物を取り囲むが如く、どこを見渡しても回避ポイントが見当たらないぐらい、まあ簡単に言えば物凄い数の狼が、「いつでも襲えますぜ」って言わんばかりにうろうろしていた。

こういう時、捕食される側は何も考えないんだろうな。というか、考えられないのだろう。君達も実際に体験してみればよく分かる。一度、このような状況になってみることをお勧めするよ。

だから俺も自然の摂理というか、本能というか、そういった感じで行動するしかなかった。

それでこの行動かよ、と皆様方は思うかもしれない。

いや、人間ってイザって言う時にはこんなもんなんだって。

前置きが長くなったが、そういうつもりで俺は行動したので、心して聞かれるがよい。

俺は、手にした杖を空高々に掲げ、モーセが海を割るが如く、こう叫んだ。

「燃え盛る紅蓮の炎よ、彼の者を焼き尽くせ！！　ファイア！！！！」

さて問題、この後どうなったでしょう？

1 声は虚しく響き渡るが、その潔さと吹っ切れた感が狼に精神的ダメージを与え、一団は退散した。

2 変質者がいることを一般ピープルにより通報され、赤いサイレンによって狼とともに御用。

3 夢か幻か、大魔法使いデビューを果たしモンスターを一掃した。

で、本編は一応ファンタジーであるからして、ここから夢と冒険の世界に強引に引っぱっていききたいと思うのだが、皆様くれぐれも振り落とされずについて来て頂きたい。

ということで、俺の詠唱とともに杖は発光し、画面でしか見たことなかった光景が、俺の目の前で鮮やかに繰り広げられた。

気がつけば、そこいらじゅうに居やがった狼たちも、跡形もなく消えうせていた。

バックミュージックで戦闘終了音楽が流れていそうな雰囲気の中、俺はただただ立ち尽くすしかなかった。

「……、さすがに使えるとは思わなかったわね……」

羽少女も上空の敵を蹴散らしたのか、俺の前にふわりと下りてきた。手にはもう、先程の鋭い槍は見当たらなかった。よく見ると、背中に背負っていた羽まで消えうせている。

「ねえ、あんた何者……？」

そんなことこっちが聞きたい、という言葉も、今までの衝撃的なできごとによりうまく話せなかった。というか、今現在も、俺は夢を見ているのではないかと感じるようになってきた。ああそうだ、これは夢なんだ。家に帰って昼寝でもしてたら、ゲームのやりすぎでこんなありえねえ夢を見ちまってるんだ。夢だゆめだ、悪い夢なら早く覚めてくれ……こうやって思いっきり目を閉じて、さあ、ゆっくりと目を開くとそこは……

「現実逃避中悪いんだけどさ、こっちも急いでるんだけども」

やっぱり無理か、無理なのかよこんちくしょう。

「つてことで、あたしだって信じたくないけれど、あんたがあたしの姿を認識できて、その杖を使えて、さっきの野郎どもを倒したってコトは全て事実だっていうことよ。いい？」

「は、はあ……」

羽少女はいらない厄介者を偶然にも拾ってしまったという、こちら側にも一瞬でわかる明らかな不快顔で、「心底」ため息をつく。俺だって、こんなパラレルワールドになんか、かわりたくない。

「で、どうしようか」

「え……?」

いやいや俺に聞かれても……

「全く、近頃の若い男子ってもんは、主体性がないんじゃないの？
曖昧に穏便に愛想笑い浮かべてたらいってもんじゃないわよ全
く」

「……」

今この非日常的展開で適応できる人間なんて、そうそう居ないと思
うんですが。

まあ俺も「近頃の若い男子」真っ盛りであるからして、そのような
心の意見を口に出すことはできませんが。

俺がそのまま黙っていると、羽少女はさもめんどくさそうに言っ
た。

「仕方ない。あんた、連れて行くわ」

「…どこに?」

決まってるじゃない、とでも言いたげな顔で、羽少女は続ける。

「天界」

「……」

この言葉で、俺の平穏な日常は完全に姿を消した。

第4章…ヒカエオロ！

「あんたそれ使えるんだから、空ぐらい飛べるでしょ？」

「はっ！？ え、そ、空！？」

少女は、俺が依然握り締めていた長い杖を指して言った。そういや、これ返さなくていいのか？

というか、俺、やっぱりこの杖で魔物を倒しちまったんだよねあ

……

俺が何も言わず杖を凝視しているのを見て、少女はため息を吐きつつ、ゆっくりと諭すように言った。

「それはね、使用者の精神に作用して働く汎用性デバイス。あんたがイメージすることによって、勝手にそれをスクリプトしてくれるっていうお手ごろな武器。っていっても、ある程度のCPUが必要なんだけどね」

「……何を言ってるんですか？」

「……本当にあんた、『普通』の人間なのよねえ……何で、干渉できるんだろ……。とりあえず私が悪かった。もう一回説明するわ」
少女は杖を取り、高らかに宣言した。

「天駆ける力を我に！ フライ！！」

その詞を受けて、杖はまばゆく光る。そして、気がつけば少女には先ほどの羽が背中に生えていた。

「まあ、こういうこと。つまり、やりたいことを頭でイメージすることによって、それを現実に起こすことができる代物ってわけ。OK？」

「は、はあ」

まさに『魔法』な訳ですな……。で、俺がさっきやったことも、

今彼女がやったことと同じことだった訳だ。

「でもイメージするだけなら、わざわざ詞にしなくてもいいんじゃないか？」

「まあそうなんだけど。実際私は詞なんか使わないし。でも、イメージを具体化するのに詞にしたほうがやりやすいのよ。自分自身に暗示をかける意味でもね」

初心者には呪文が必要だってことか。

「それで、今から天界に行くんだけど、いいよね？」

「え、今から？　いきなり!？」

本当にめんどくさそうに、少女はため息をついた。

「あたしだって暇じゃないのよ。こんな厄介なこと早めに誰かに任せちゃいたいし、あんただって、このままここに居てもさっきのようになんか襲われるだけよ？」

「な、何でもまた俺が襲われなくちゃいけないんだ!?!？」

俺は驚いて、少女に思わず食って掛かった。冗談じゃねえ、何でも俺が、この平和な二十一世紀に、生死をかけた戦いをせねばならないんだ！

「知らないわよ！　あたしもまだ、なんであんたが干渉できるかが分からないんだから！　でも、あんたは既にあたしとのつながりを持ってしまってるから。あたしたちと関わりある者は例外なく、人間界では魔物のターゲットになっちゃうのよ。ご愁傷様」

「……まじかよ」

「で、あたしと一緒に居たほうがあんたも安全だってことで、手っ取り早く天界に行きたいんだけど、それでいいよね。うん、異議なし」

その台詞は俺が言わないと意味がないのでは。

少女ははなから俺の意見など無視する構えで、勝手にさっさと自分の羽をだしやがった。

「さあ、あんたも空を飛ぶ準備をしなさい。さっきのあたしみたいに、高らかと宣言するのよ」

「わ、分かったよ……」

さっきは急を要していたということもあって、呪文を唱えるには抵抗がなかったが、このように畏まってしまうと、いかんせん気恥ずかしい。戸惑っていると案の定、少女から「早くしろ」とにらまれた。

仕方ない。俺は、今、この瞬間、大魔法使いに転職する!!

「天駆ける力を我に！ フライ!!」

まばゆい光が俺の周りを取り巻く。

そして、少女と同じように、俺の背にも真っ白な羽が、本当に生えやがった。

「う、わぁっ……」

「……やっぱり、使えるのよねえ」

軽く地を蹴ってみる。

すると、体は簡単に、宙に浮いた。

地球の重力なんて、全く感じないほどに。

「じゃあ、さっさと天界へ行くわよ。あたしについてきて」

少女はそういった途端、俺を先導するなんてことを瞬時に忘れたらしく、ものすごいスピードで天空に昇っていった。

「お、おいっ！ ちょっと待ってくれよ!!」

少女の姿が米粒くらいになってしまったが、見失わないように、俺も必死の思いで後をついていった。

「そうだ、あんた、一応聞いておくわ」

ロケットのようなスピードで先頭を切っていた少女が、いきなりその速度を緩めた。慌てて俺もそのスピードに合わせる。今更何を愚痴っても聞いてもらえないので、俺は素直に少女の言葉を聞いた。

「名前。あんたみたいな人間にも固体識別名はあるんでしよう？」

「そんな、人を何かの標本に載った生物みたいに言うなよ」

「あたしにとっては、あんたの名前もショウジョウバエも、一緒の項目として頭の中に分類されるわ」

ハエと一緒になのかよ。

「他人の名を聞く前に、自分の名前を言わないといけないんじゃないのか？」

「そんな決まり、あたしの中には存在しない」

「ったく、ああいえばこういう。」

仕方なく、俺は自分の親に幸せを願ってつけられたありがたい名を、この俺をハエと同一視しやがる奴に言った。

「ふーん、志^{シキ}稀^キっていうの。字面だけだったら完全にあんた女ね」

「うるせえ、名前には拒否権がないんだ。そういう、お前はなんていう名前なんだよ」

「あたしの名前を知ったところで、それを活用する日は来ないでしょうけれど、しゃーなしで教えてあげるわ」

少女は、くるりとこちらを向いた。

そして、名を言った。

自分の存在を目いっぱい誇示しながら。

「あたしの名前は、カナデ。演奏の『奏』と書いてカナデと読むわ。心に深く、刻み込みなさい」

できれば速攻「わすれる」コマンドで忘れてやりたい。ここ数時間ですごった全ての出来事を。

そんな思いを知る由もなく、羽少女「奏」は首にかかった長い髪を後ろへ払い、さっさと前方を向く。

「じゃあシキ、改めて出発するわ。早くしないと今日中に着かないじゃない」

「え、そんなに遠いのか！？ 俺はてっきり五分くらいで着くものかと……」

「あんたを連れてるから、私だってゆっくり飛ばなくちゃいけないのよ。いつもならすぐに着くんだけれど」

俺は、今の速度でも十分スピード違反モノだったのだが。天界人とやらは、奏のような輩ばかりなのだろうか。よく衝突事故が起きないものだ。

「ちよっとペース上げるわよ。ついてきて」

と、言うが早いのか、奏はさっきの二倍以上の速さで大空へと舞い戻った。

全然、「ちよっと」じゃないと、俺がぼやく暇もなく。

第5章：休憩

「な、なあ、いつになったら、その天界とやらに、つくんだ……？」
かれこれ数時間が経過。

その間も俺たちは黙々と青空を飛び続ける。

やはり、この魔法の力もマジックポイントがあるのだろう。だんだんと、俺の体力がエンプティに近づいていくのが分かった。

「そうね、あと二時間ほどつてとこかしら。何、あんた息切れ？」

「ちよつと、ヤバイ……。気抜いたら、……落ちそう」

息も絶え絶えになってそういうと、奏はやつとスピードを緩めてくれた。顔は見なくとも、渋い表情をしているのだろう。

「はあ……。まあいいわ、ちよつと休憩しましょ。そうね、あそこがいいわ」

奏は、何の変哲も無い雲を指して、俺について来るよう合図をした。

いや、いやいや、あれはただの水蒸気の塊ではないのですか？「お空の雲で休憩ね♪」なんて、冗談言ってる場合ではないのですが、「とにかく来なさい。あんたは黙ってあたしの言うことに従ってればいいのよ」

「……」

既に、俺は奏姫の下僕と成り果てているらしかった。

俺たちは、奏が指差した雲までやってきた。しかし、近づけば近づくほど、それはただの水蒸気であった。

「どうするんだよ。こんなところで休めるのか？」

「このままじゃ無理よ。当たり前じゃない」

おかしい。俺は同じ懸念をさっき持っていたはずだが、かなりバカにされてしまった。

そんな俺のことはやはり微塵も気にかけず、奏はさっさと雲の前に立ちはだかった。

「……」

奏が目を瞑ると、体から幾重もの魔方陣が出現した。

そして、それは前方にあった雲を瞬時に取り巻いた。

しばらくすると、水蒸気の粒であったものが、なんと白く硬質のある物質に変化し、あたり一面が地面のようになった。

「す、すげえっ！　こんなこともできるのか！？」

「ま、まあね。」

素直に喜んだ俺の反応がうれしかったのか、奏は何とも意外な表情を見せた。そうやって、可愛い仕草のままであれば、俺のやる気度数も格段にアップしてることだろうにな。

しかし奏は一瞬で元のツン全開性格に戻り、「早くこっち来ないと、落ちても拾わないわよ」と恐ろしい言葉を吐いてやがった。

「あー疲れたー」

「……」

何を思っているのか、奏はまじまじと、俺の顔を見つめていた。

「何だよ。俺の顔に何かついてるのか？」

「……、たとえあんたの額に『肉』と書かれていても、私は教えてやんないわ。」

この減らず口が。

だが俺は、奏を相手にする体力も無いくらい疲れていたため、反論もせずおとなしく聞いていた（あくまでも体力がなかったせいだ）。

しかしその間も、奏は俺の顔をずっと見ている。

そんなに俺の顔が面白いのか？

「何か、シキって、不思議な感じ」

「……？　どういう意味だ？」

「なんでもない。こっちの事情」

全く意味が分からん。

こんなどこにでもいるような男子高校生の顔、見てもムサイだけだ。

「ねえ、シキ。あんた本当に、何も関わっていないわよね？」

「……何に？」

「私たちに」

当たり前だ。

俺は一度たりとも宇宙人にさらわれたりなどしていないし、天界人はおろか、魔物だってテレビ画面上でしか見たことが無い。ごくごく一般的な標準家庭で育ち、特に才能に恵まれている訳でもなく、成績も中の下くらいで、スポーツだってはつきり言って得意ではない。全く持って、これ以上ないほどにノーマルな一般ピープルである。

「……」

言ってて悲しくなるほどの俺の答えに納得がいかないのか、奏は一人で思惑の海へ航海に出かけてしまった。俺のほうが、何でこんな目に遭っているのか知りたいぐらいなのに。

「まあ、その天界とやらに着けば、お前が悩んでる原因ってのもつかめるんじゃないか？　今考えたって、仕方ない」

「それもそうよね。天変地異が起ったただけかもしれないだし」
起こった「だけ」とな。

俺にとっちゃあ命がけなんすけどね。

「じゃあ、そろそろ行きましょう。あとちょっと、頑張りなさいよ」

「ああ、分かったよ……」

第6章…天界のクレス様

それから本当に二時間かかった。

俺の体力は、すでに限界を超えていた。

あたりまえだ、つい半日前ほどに魔法が使えるようになったんだ。レベルで言ってみれば、せいぜい二か三程度だな。この我慢大会で、MPだけはかなり上がったような気がする。

そして、必死の思いで飛び続けた俺に、とうとうゴールが迫ってきた。

その目に、飛び込んできたのは。

「……」

天界っていうのは、やっぱり俺たちが想像するような天国みたいなものなんだな。

なんていうか、言葉に表せないくらい、神々しい。

凱旋門を数億倍大きくしたような煌びやかな門がまず立ちはだかり、その周囲には、ミケランジェロのダビデ像を、やっぱり数億倍したような像が並ぶ。どこからともなくゴスペルが聞こえてきたり、あちこちに小さな天使たちが飛び交ったりしている。

死んでしまったと錯覚してしまうほど、そこは確かに天国だった。

俺たちは荘厳な門をくぐり、シンデレラ城のような城へ到着した。

「さあ、まずはクレス様に挨拶するわよ。言っとくけど、『くれぐれ』も粗相のないように」

大の高校生である俺様が粗相をするように見えるかよ。わざわざカッコ書きで強調しなくても分かってるっつうの。

というのは俺の心の声であるが。

「なあ、クレス様っていうのが一番偉い人か？」

「一番っていうか、私たちクラジスの中では全てを掌握しておられる方ね。天界全土は、また違う方が支配してるのよ」

「ふーん。クラジスって、何だ？」

「あんたは何も気にしないでいいのよ。とりあえず、こっちに來て」
そういつて、奏は長くただっ広い城の回廊を先導する。

全く、ここは何でもかんでもデカすぎる。俺が縮んでしまったように思う程だ。

「ここよ」

奏が歩みを止めたのは、どうやって開ければよいか分からないくらいのでかい扉の前。俺たちの遙か上空、ビルで言えば十階ぐらいの位置に、申しわけなさそうに二対の取っ手がつけられていた。

あれ、絶対に意味ないな。

「クレスⅡコンダクト様、光の守護、奏、只今戻りました」

「よくぞ無事で。お入りなさい」

どこからとも無く女性の声が木霊し、バカでかい扉がゆっくりと開いた。

これもやっぱり魔法の力なんだろう。開いた扉の先には、自動的に真っ赤な絨毛がくるくると敷かれた。

絨毛の遙か先、霞がかって見えにくいのが、そこにやっと、人と思しき姿を捉えた。

前言撤回、これは人ではなかった。

まず、目を引くのは、背中に携えている大きな銀の羽。それは一枚一枚が光り輝いており、宝石のように美しいものであった。そして、よく絵とかで見る聖母マリア様のような衣装。それらは、絶妙

なバランスで着ている者を映えさせた。髪は長く、少しウェーブのかかっている金髪。瞳は吸い込まれるほど青い。こんな、彫刻のよう
に美しい者が、人である筈がなかった。

「お疲れ様です、奏。少々帰還が遅かったようですね」

「申し訳ございません。只今からその原因をお話したいのですが…
…」

そういつて、奏は俺に振り返り、「前へ出ろ」という合図を送ってきた。

まじかよ、こんな神様の前で、俺、挨拶するのかよ……。

「ああ、この方が例の『人間』なのですね」

「……、いっ!!」

俺が気脅されて沈黙していると、奏が横から肘鉄を食らわしてきた。

ほんとに、容赦ないよな……。

「お、俺は志稀と言います。なんの変哲もない、ただの平凡な高校生です……」

「ふふっ、気配からして、その言葉に偽りは無いようですね。全くもって、普通の人間のようにです」

「そうなんですよ、クレス様。シキは、どこからどう見てもただの凡人なんですけれど」

凡人となると、嫌な響きになるのは何故だろう。

「私も全く検討が付きませんので、こうして天界へ連れて来たのです。クレス様なら、何かお分かりになるだろうと思って」

うーん、と神様が唸られる。

「申しわけございません。私はこの世界に生を受けて、幾年もなりますが、このように私たちを認識できる人間の方を見たのは、これが初めてです」

「えええっ！ クレス様も初めてなんですか！！？」

やっぱり、神様なんだから寿命は長いんだろうな。こんなに綺麗な人だけど、何歳なんだろう。

そんな邪推を見抜かれたのか、俺はクレス様の笑顔の中で陰悪なオーラを感じた。

「私たちと人間とは、本来交わることのない『均衡の種族』です。聖と魔、どちらにも属さない中立の属性。そのような方が、何故私たちを認識でき、更にウイスマメントまで使用できるのか。これは、少し調べないと分かりませんね」

「はあ……」

天界のお偉い方も分からないとな。

俺って、一体何なんだ……！！？

本当に、突然変異で力を持ったとしか、思えない。

「仕方ありません。シキさんには申し訳ないですが、少し、試させていただいてもよろしいでしょうか？」

「え、試す？ 何を？ 俺を??？」

いきなりテストみたいなことを言われて、明らかに動揺する俺。学生の性^{さが}かもしれないが、抜き打ちテストの類は敏感に反応してしまう。

「大丈夫、そんなに難しいことではございません。ちょっと、あなたの力を見せていただきたいのです」

「は、はあ……」

何だ、この展開は。

よく分からんが、どんどんすごいシナリオになっていくではないか。何もしていないのにストーリーが進んでいくのは、典型的にクソゲーの部類だぞ。

ああ、夢ならもうそろそろ覚めてくれないと、俺、本気でゲーム

の主人公だよ……。

「簡単なことです。今から、擬似的に魔物を召喚いたしますので、シキさんはそれを倒してください」

「え、えええっ！！？ そんなに簡単に簡単なことなんて言いますが、全然簡単なことじゃないですよ！！」

……別に狙ったわけではない。それだけ動揺していたんだ。

もう一度整理してみよう、俺はただの平凡な高校生だ。

それをだ、いきなり「魔物を倒してください」だ。

RPGの主人公たちは、ボスと戦う前に十分経験を積むだろう。雑魚敵と数十回数百回、嫌というほど肩慣らしをして、力がついたらボスに挑むのだ。

しかもそれは、リセットが効く。

それがだ、俺の場合はどうだ。

実戦はあの、狼野郎との戦いだ一回のみ。

しかも、あの時勝てたのもまぐれ当たりな可能性が高い。

そんな、ゆとり教育真っ只中の高校生に、魔物を倒せと神様は言う。

この状況が理不尽極まりないことだということを、少しでも分かっていただけなら俺も報われることだろう。

「で、あんたの言い訳タイムは終わった？そろそろ始めたいんだけど」

ううむ、俺の心の声が聞こえているのだろうか。

全く、こうなりゃ当たって砕け散ろう。神様もその方が、手っ取り早く俺を元の世界へ返してくれることだろう。

俺は覚悟を決めて、奏からもらった杖を握り締めた。

「では、了承していただけるんですね」

「ええ、まあ、とりあえず。負けても、死にませんよね……？」

一応聞いておく。

神様はにっこりと笑って、こう言った。

「はい、死にはしませんが、魂は消えてしまいますのでご注意ください」

って。

おんなじことじゃねえの……？

第7章：試練

その瞬間。

俺の目の前に激しい閃光が瞬いた。
眩しくて咄嗟に目を閉じる。

恐る恐る目を開くと、そこにいた奏や神様が居なくなっていた。

「な、なんだ…、この場所……」

そこは白く、何も無い世界。

さっきまでそこにあった豪華な家具類、突き抜けるような天井、
赤い絨毛、何も無かった。

こんな世界、神経がやられそうだ。

と、前方に一瞬、空間がゆがんだような気配がした。
すぐにそちらへ視線を向ける。

その時……

喧騒が耳に響く。

聞き覚えのあるチャイムの音。

机や椅子の擦れる音。

教師が黒板に、字を書く音。

よく知っている、友達の笑い声。

ずっと、視界が開けた。

「しーくん、なーにぼんやりしてるんですかぁ？」

小林が、俺の顔を見て言った。

俺は、ぼんやりとした表情で言う。

「お前はいつも楽しそうで、いいよなあ」

「なに、どしたの？哲学でも考えちゃってる？そんな非現実よりさー、俺たちに実際に迫っている現実を直視しようぜー」

にへらっと、小林が笑う。

「今日も頼みますよお、シキ大納言様あ」

俺は、無表情で机からノートを出し、小林に放る。

「はあ、ありがたやありがたや」

ノートを拾う小林を、俺は見つめる。

ここは、俺の学校。

この出来事は、確か今日の昼に起こったことだ。

俺は、長い夢でも見ていたのだろうか。

どこから夢で、どこから現実なのか。

考えると頭が痛い。なんだかどうでもよくなってきた。

小林は、一心に俺のノートを写している。

俺の解答が合っているかもそっちのけだ。

ああ、今日は疲れたなあ。

さっさと帰って、風呂入って寝よう。

明日のことは、明日に考えればいい。

このまま、深い夢の中へ。
今までのことは、全て忘れて……

と、その時に。

俺はふと、何かを握り締めていることに気づいた。
なんだ、杖じゃないか。

この杖はすごいんだぜ、俺の思った通りに、魔法が使えるんだぜ。
嘘じゃねえよ、何なら、試してみようか？

そうだなあ、じゃあ、お前をカエルにしてやろう。

気をつけろよ、カエルになると極端にステータスが落ちるからな。
お前だったら、ザコ敵でも一発で戦闘不能だろうな。

じゃあ、よくみるとけよ。

………

そらみろ、本当だっただろう？

小林、お前はカエルになったんだ。

俺は、この杖で魔法使いになったんだ。

何だ、小林。俺がうらやましいのか？

そんなに口から、長い八重歯を出して、今更可愛い子ぶるんじゃないよ。

よく見たら、背中にこうもりみたいな羽が生えてるな。

いつの間にそんなアクセサリーを買ったんだ？お前、趣味悪いな。

おい、折角俺がカエルにしてやったのに、勝手に姿を変えるなよ。

頭からそんな角生やしたって、もてねえぞ。

………。

よく思い出してみる。

小林との付き合いは長いはずだが、こんな姿の生物は人違いだ。

ましてや、今のこいつの姿は人でもない。

俺は、手に持っている杖を見る。

何故今、俺は学校に居るのか。

いや、俺は今学校になんか居やしない。

それどころか、自分のいた世界にも存在していない。

俺は怪しげな少女と出会い、あれやこれやと天使の世界へ連れて来られたはずだ。

そして、神様が試練と称し、俺を魔物と戦わせていたはずなんだ。ということはだ。

目の前に居る小林もどきは。

俺の魂を食らわんとしているにつくき魔物野郎ということではな
いか。

「……こんなところで、俺の高貴な魂を食われてたまるかよ!!」
聖なる天のいかずちよっ！ 彼の者に裁きを下せっ！ サンダーっ
!!」

俺が小林もどきに鉄槌を食らわした瞬間、再び辺りが激しく閃光
し、

俺は気づくと元の城に戻っていた。

「……倒したのか？」

「……」

見ると、神様と奏が、俺を凝視して固まっている。

「あ、あの、えっと」

「……奏、私は夢でも見ているのでしょうか」

「いいえ、私も同じ光景を見ていましたから」

こいつら、俺のことを魔物に食わせようとしてたな。

そんなこと、あってたまるか。

「普通の人間なら、幻覚突破などありえないこと……。やはり、あなたは何か特別な存在なのでしょうか……」

「あんた、本当に人間なの!!?」

そこまで驚かれると、俺も気後れしてしまうのだが。

しかしまあ、こちらが命がかかってますんで。

「これは、しばらく様子を見てみないことには、何とも言えませんね」

神様は、しげしげと俺を見つめる。

そんな、俺を何かの天然記念物みたいに見ないでほしい。俺なんかにそんな価値はない。

俺は、とにかく元の世界に帰りたいだけなのだ。

「あの、く、クレス様」

「はい、何ですかシキさん」

「俺、いつになったら元の世界に帰れるんでしょうか……?」

うーん、と神様が唸る。

本当に冗談じゃねえ。もうそろそろ茶番はいいだろう。今までの冒険は夢オチにしているからさ。

「今シキさんを地上に帰したら、闇の眷属たちに狙われてしまいますしねえ」

と、神様が良案を思いついたようで、ぽんと拳を手のひらで叩いた。

分かりやすい反応だ。

「調度いいです、奏、シキさんしばらく地上に待機してなさい」

『は、はああっ!!!?』

二人は同時に声を上げた。

「なんで私がこんな得体の知れない人間と一緒に居なければいけない

いんですか!!?」

「なんで俺がこんな得体の知れない天使と一緒に居なければいけないんですか!!?」

「あら、息もぴったりじゃないですか! お似合いですよ、お二人」

よかったよかったと、神様は一人納得している。

本当に冗談じゃない。今日一日だけでも俺にとっちゃエベレスト登山並みに辛く険しい道のりだったのに、それがこれからも続くというのか。俺のバラ色ハイスクールライフをこんな冷酷非道な天使様に邪魔されたくない。というか、卒業するまで人間としての精神を保っている自信がない。

「奏、あなたに特別任務を与えます。シキさんを地上で守ってください」

俺の決死の抗議もむなしく、クレス様は勝手にきりつとした目つきになって、奏にこう命じた。

「シキさんの正体が分かり次第、すぐにあなたに伝えます。それまでの辛抱です」

ぶすつとした態度で、しぶしぶ奏は頭を垂れる。あいつ絶対怒ってる、ぜーったいに怒ってる。

「そして、シキさん」

「は、はい!」

急に呼ばれて、改めて俺はクレス様に居直る。

「シキさんは、本来ならば地上に生きる者。このような世界を永遠に知ることなく人生を全うするのが本来の生き方なのですが、何が起こったか、あなたは天の力を有してしまいました。それにより、魔物たちが力を奪うためにシキさんを襲ってきます。その場合、あなたのその力を使って闇を退けてください。しかし、その力を目的以外に決して使用しないこと。大丈夫、あなたが力を使わなくても、奏があなたを守ってくれますから」

「はあ……」

この超気分屋天使が守ってくれる保証は全くない。

宝くじに当たる可能性の方が高いと思う。

そんなことを考えながらクレス様の話を聞いていると、クレス様はそつと最後に耳打ちをした。

「奏は私の言うことに絶対ですから！ 危ない目にはあっても、あなたを殺すようなことはしませんのでご安心を☆」

……危ない目には遭うんだな。

もう、何も言うまい。色々むなしいだけだ。

とにかく、俺たちは一度地上へ戻ることになった。

第8章：抵抗

さて、今回は久しぶりにクイズから始めよう。

「志稀くんは、3・5時間ほどかけて天界に行きました。帰りは何時間かかったでしょう？」

小学校で習う、時間・距離・速さの公式なんて、もう当てはまらない。というか物理法則は魔法の力で全て無視されるんだったな。で、考えるだけ無駄だったことで、ちゃっちゃと正解を申し上げる。

「答えは2秒」

何人の人がこのクイズに正解できただろうか。まあ「人」の時点で解答者にはかなりのハンデがあるので、正答率は半端なく低いと思われる。

あの後、神様が魔法の力で、俺たちを「一瞬」にして、ほんとうに「あ」という間に、もとの世界へ帰してくれたのだった。そんな便利な力があるのなら、俺は無駄な耐久レースをする必要性は微塵もなかったというのに。

今回ばかりは精神的ダメージが大きかったので、奏にちよつと抗議してみた。しかし。

「あんたが途中で力尽きて、あたしの知らないままに墜落してしまった方があたし的には楽じゃない？ そっちの可能性にかけてみたのよ」

案の定一蹴された。というか、本当にこいつ天使なのかよ。俺にとっちゃあ悪魔にしか見えないのだが。

で、とにかくにも俺たちは地上に帰って来れた。

しかし、その後俺はどうすればいいのか分からずに、「疲れた」という奏の言葉を受けて、天使様をとりあえず俺の部屋に入れた。この聖域に入ることができる異性は俺の母親と未来の彼女だけだ、という無駄なポリシーを17年守り続けていたが、それは儚くも夢想と化した。

天界人は、普段は人間の目には映らないらしい。母親が台所でカレーという名のレトルトを茹でていたが、俺の帰宅にさえ気づいていないようだった。一応「ただいま」とだけ声をかけ、俺は奏を連れてすぐに二階の部屋へ向かった。

帰宅して以降、奏は仏頂面で窓際に座ったまま、一言もしゃべらなかつた。ため息ばかりは何万回とついている。この部屋の二酸化炭素濃度は、通常よりはるかに高いのだろうと思われる。

一回絞り切ったレモンから汁を出すような気持ちで、俺はけなしの勇気を振り絞る。

「な、なあ」

「……」

神様は何故、俺のようなチキン野郎にこのような大役を任せたのか。これは前世からの贖罪か何かなのか。そうだとしたら、俺の祖先様はどれだけの悪行をしでかしてきたことだろう。

何とかして話題を作ろうと、俺はゼロに近いコミュニケーション力を総動員させる。

「また、その魔物って奴が襲ってくるのか？」

「……そうかもね」

「俺もまた、襲われちゃったり、するのか？」

「……たぶんね」

やった、相槌は打ってくれた。これは人類の偉大なる第一歩だ。国民栄誉賞をもらってもいいくらい、俺は人類代表としてがんばっている気がする。

「……言っとくけど」

急に、天使様がしゃべってきた。

俺はびっくりして思わず肩を震わせちゃった。俺が栄誉賞を受賞する余韻に浸っている間を狙ってきやがるとは、卑怯だぞ、天界人。

奏は、そんな俺の複雑な心境を完全無視して、続ける。

「あんたが魔物に襲われようが食いちぎられようが一緒に戯れて遊んでいようが、あたしには『全く』関係ないのよ。あたしだってね、一応これでも役職付きの天使なんだから、あんたみたいなミジンコと遊んでる暇なんて『これっぽっちも』ないわけ。『あんたを守る』っていう仕事なんて、『朝起きて歯磨きをする』ことの方が重要なくらい、あたしが抱えてる仕事の優先順位からしたら下の下の下に位置するわけよ。そんな仕事を引き受けてたら、山ほどあるあたしの仕事が一向に減らないわけ。むしろ増えるの。どうしてくれるのよ。クレス様の命だから仕方なーーーーーく引き受けてるけど、あんた、そこんとこ分かってるんでしょね」

「……」

かなりの長台詞だった。よくかまずに全部言いきれたな、なんて、全く他人事の様聞いていた。

俺だって、思うところはたくさんある。読書感想文で原稿用紙八枚という宿題を課されても余裕でクリアできるくらい、たくさんある。

しかし、やっぱり俺はそんな思いを口にすることができなくて、うつむいていることで時間を経過させる、という卑怯な手法しかとることができなかった。

一言だけ発した言葉は、明らかに俺の弱さを象徴させるものだった。

「ごめん」

「……」

それだけ聞くと、奏は最後に一つだけ大きなため息をついて、窓から飛び去ってしまった。

とっくの昔に日は沈み、雲間からは三日月が顔を出していた。仕方ないだろ、俺はこういう「人間」なんだ。

昔から、こんな性格だった。

人の言うことを従順に聞いていれば、とりあえずその場は流せる。その時は辛くても、反抗する方が体力を消耗する。時間が、全てを解決してくれる。

だから、大人から見たら俺は優等生で、子供から見たら俺は卑怯者だった。

反抗することが面倒くさかったし、辛かったし、怖かった。本気の喧嘩なんか、今までしたことないのかもしれない。

この人間社会を生き抜いていくには、

俺のような生き方の方が賢いんだと思う。

既に社会はコンピューターのように正確に時を刻んでいる。

それなりに勉強して、それなりにいい学校を出て、それなりの会社
に就職して、それなりの生活を送る。

そうやって生きていくのが必然の様に、人は皆同じような人生を
歩む。

一回でもその社会システムに逆らってしまうと、途端に生きづら
くなる。

社会は異常を極端に嫌うからだ。

俺は社会に組み込まれたピースになることに対して、そこまで抵
抗を感じなかった。むしろその方が心地よいのではないかとも思っ
た。

俺が考えなくても人生はなんとなく決まっているんだ。あとはそ
れに外れないように適当に努力していればいいんだ。

しかし、今の俺は何なのだろうか？

奏という天使に出会い、魔法を使えるようになった。その力で魔
物を倒し、天界にまで行った。

こんな俺を、果たしてまだ人間社会は受け入れてくれるのだろうか？

俺は以前、というか今の今まで、日々の生活に飽きていた。

従順に、人の言うことを聞く生活に、飽きていた。

奏と出会ってから、以前と同じような生き方をするのか？

あんなに暇だと嘆いていた、以前と変わらない生き方をするのか？

こんなに、面白そうな力を手に入れたのに？

「天駆ける力を我に！ フライ！！」

俺は部屋の中で、宣言する。

そして、奏が飛び去った窓から、勢いよく飛び出した。

「かなでー！ーっ！！」

俺の家のはるか上空。

雲もあまりない、穏やかな夜。

どこにいるかも分からない相手に向かって、俺は目いっぱい叫んだ。

「さっきはよくも言ってくれたなあっ！！ 俺だって、好きこのんでお前なんかを見つけたわけじゃないんだよっ！！ お前ばかり被害者みたいに言ってるけど、俺だって酷い目に遭ってるってことが分からないのかよっ！！ 右も左も分からないまま、今まで戦ったこともないし空なんて飛んだこともないし、ましてや魔法なんて使ったことあるわけないし、そんな状況でも一生懸命がんばろうって思ってるんだよっ！ それを何だ、俺をハエとかミジンコとか呼びやがって！ お前の仕事が増えたのも分かるけど、俺だって平穏な生活がしたいんだよっ！！ だから、ちょっとでもお前と仲良くなろうって、がんばってるんだよーっ！！」

下界で、何事かと人が家から出てきているのが見えた。

聞いてもらいたい相手には、所詮聞こえない俺の言葉。

何だかとても、滑稽に見えた。

「……帰ろう」

五月といえど夜、しかも空は寒い。

くしゃみを一つして、俺はのろのろと自分の家に帰って行った。

「お腹減ったんだけど」

俺んち。

六畳ほどの狭い部屋の、3分の2くらいのスペースに、先ほどはなかった家具やら衣装やらが散在していた。

その中心にでっかいテーブルを置き、数時間前と変わらない様子で、奏が頬杖をつきながら窓から入ってきた俺のことを見上げていた。

「あ、あれ、奏……？ 何して…」

「何って、私は地上であんたを守るっていう使命を受けたでしょーが。あんたも聞いてたでしょ？ だから、これからあたしもあんたの部屋で生活することになったのよ」

「は、せいかつ？ 誰と？ 俺と？」

「あんた以外に誰が居るってのよ。はあ、こんな狭い部屋で暮らすだなんて、犬小屋の方がまだましなんじゃないかしら」

そんなことを言いながら、奏は持ってきた家具たちを整理し始めた。ものすごい量だが、どこからどうやって持ってきたのだろうか。そんなことより、俺は、彼女に今すぐ重要なことを聞かなければならない。

「なあ、奏」

「……何よ」

沈黙が流れる。

やっぱりいつまでも言いだせない俺。
しびれを切らして、奏は言った。

「……あんたがハエやミジンコではないってところ、あたしに証明してみなさい。そしたら、あんたを認めてあげる」

「……」

今の俺は、黙って頷くことが精一杯だった。

その瞬間、奏のお腹がぐうと鳴った。

「わ、分かったんならさっさとあたしに食事を用意して！ 今日ほとんどに疲れたんだから！」

天界人もお腹がすくんだな。タイミングの良い腹の虫に、今は感謝でいっぱいだ。

レトルトカレーが奏の口に合うかどうかは分からないが、奏はどんな食べ物も文句しか言わないだろうからよしとする。

さっきと変らない罵声を浴びながら、俺は階下に降りて行った。

そんなこんなで、俺の長い一日がやっと終わりを告げたのだった。

第9章…パン

そして、俺たちは新しい朝を迎えた。

奏は青い某たぬきさんのように、押し入れの中に勝手に寝床を作って寝ていた。俺はというと、彼女の占有スペース外のほんの狭い空間に追いやられ、体を丸めながら苦勞して寝なければいけなかった。

ぱっと見、奏の荷物で溢れかえっている俺の部屋だが、これも普通の人間には見えないのだという。しかし、ということは一般人から見たら、俺は何もないのにこうやって片隅に寝ているモノ好き、ということになる。母親には極力部屋に入っていただかないようにしよう。天界人は便利なものだ。常にステルス迷彩で、何をしようとするのだから。一緒に居る俺にとっては迷惑極まりない。見えたら見えたで説明のしようがないのだが。

今日は土曜日。俺の生まれる前はこの日も学校だったらしいが、世の中は学生に「休み」という堕落時間を与えた。しかし、いつもなら心躍るハッピーサンデーでも、今日はまったくもって気が重い。というか、今日から以降、俺に気の休まる日はやってくるのか甚だ疑わしいものだ。

いつもなら昼過ぎまで寝床でごろごろしているのだが、今日はそんなこととしていられる状況ではなかった。何せ、押し入れの中に天使様がいらっしゃるのだから。俺は、学校に行く時でさえここまで早く起きないであろう、新聞配達バイクの音が聞こえるか聞こえないかくらいの時間に目が覚め、とりあえず着替えを済ませてから無駄に時間を潰していた。

午前十一時頃。

起きてから、ずっと昨日の出来事を反芻していた。何度も何度も

夢オチではないかと考えた。しかし、俺の部屋に散らばっている謎の家具類や衣装、俺が今握っている杖が消えることはなかった。何より、時折聞こえる押し入れからの寝返りの音が、今までの出来事の決定的な証拠だった。

しかし、何故俺は、土曜日の朝、自分の部屋で、ここまでびくびくしなければいけないのだろうか。奏は一向に起きる気配がない。俺だって、できればそうやって惰眠を貪りたかったよ。

と、考えていると突然「ガタガタッ」という音が鳴り、直後「ガコンッ!」と一つ大きな音がした。案の定、その後押し入れから頭を抱えた天使様がそのそ出てきた。

「……痛いし狭いし、お腹減った」

とりあえず寝起きは最悪みたいだ。ああ、今日もまた奏との一日が始まるのか……

下に降りて食べ物を漁る。しかし、いつもならテーブルに置いてある朝ご飯が、今日に限って見当たらなかった。うちはパン派なのだが、パンの耳はおろかパンくずさえも見つからない。と、テーブルの片隅、お菓子の缶の下に隠れるように母親の置手紙があった。

『シーくん、今日は土曜日なのでご飯がありません。でも家中探したら何かは見つかると思うので、根気よく探してみてください。もしかしたら何もないかもしれませんが。たまには共働きの母親に同情して、前みたいにおいしいもの作ってくれたら、母は泣いて喜ぶ、確率が二割程度です。じゃあお仕事に行ってきます。なお、この手紙は読んだ後、三十秒後に消滅する……といいな』

最後の方は走り書きになっていた。おそらくこんな手紙を書いていて遅刻しかけたのだろう。こういう置手紙は、もっと目のつきやすいところに置いておくものだ。無駄な時間を費やしてしまったではないか。「何かは見つかる」と記載があって何か見つかったため

しはない。俺はさっさと探索を中止して、奏に何と言おうか逡巡した。その結果、何を言い訳しても俺は怒られる、という解答を得、俺はしぶしぶ二階へ戻った。

部屋に入ると、奏はテーブルに座ったまま船をこいでいた。そんなに眠いのなら押し入れに戻ればいいものを。しかし俺がテーブルの真向かいに座った瞬間、びくっと肩を震わせて奏は二度目の起床を迎えた。

「……おはよう」

「……たべもの」

挨拶には挨拶で返す、という基本的事項を習わなかった天使様は、開いているのかいないのか分からない程度の目で俺を見る。うーむ、どうしたものか。

「実は、食べるものがなかったんだよ」

「……たべもの」

「だから、家に今食べるものがないんだよ。だから、買って来なくちゃいけない」

「……たべもの」

埒があかないので、俺は近くのコンビニに行くために準備を始めた。

「……どこに行くの？」

ほんの少し、本当にほんの少しでいいから俺の話をまともに聞いてほしい。聞こえてきたものを右から左に流すことも、こいつはしていないのだと思う。リスニングテストでは断トツのビリであることは間違いないだろう。

「だから、食べ物を買いに」

「……じゃあ、あたしも行く」

この返答は予想外だった。奏は絶対にめんどくさがって行かないと思っていた。

「近くのコンビニだぞ？ 十分もかからないぞ？」

「今日、仕事、休みだから」

改めて思うが、天使の仕事って何なのだろうか。やっぱり魔物を蹴散らすことなのだろうか。営業職みたいに歩合制だったら、俺はすぐリストラにあいそうだな。

まあ彼女が行くと言っているのだから、無理に止める理由もない。俺は奏に外に出る支度をするように言った。人の目には映らなくとも、さすがにパジャマ姿で外には出られないだろう。既に着替えを済ませている俺は（何せ起きたのが夜明けだったからな）、階下で奏の準備が終わるのを待った。

そこから三十分、俺は下でテレビを見ながら時間を潰していると、準備を終えた奏がやっと一階に下りてきた。

その時点で、時計の針は正午を回っていた。

うれしいことに、家の近くに最近、コンビニができた。

今までは、近辺にそのような店舗は存在しなかった。この地域だけ十年くらい開発が遅れているんじゃないかと思うくらいだった。それが、社長の思いつきと言わんばかりに、本当にいきなり近所に店が出現したのだった。消費者側にしたら、ちょっとしたものはそこで用を済ませられるので嬉しい限りだが、その裏で大打撃を受けた昔なじみの店舗もあり、心境は複雑である。つい最近も、小学生のときによく入り浸っていた駄菓子屋のシャッターが閉じられたばかりだった。

「ねえ、シキ」

今だ寝ぼけ眼の奏が話しかけてきた。

「なんだ？」

「コンビニに、って何？」

これは、まだ頭が覚醒していないからなのか、奏の頭の中自体にその単語が存在していないのか、分からない質問だった。どっちの可能性も視野にいれて、俺は慎重に答える。

「家の近くに最近できた店だよ。親がメシ作ってないときには良く

世話になるな」

「ふーん、ご飯を売っているお店なのね」

この返答は明らかに先ほどの疑問での後者の可能性を示唆している。何だ、天界人っていうのは人間の文明に疎いのか？魔物討伐のためにちよくちよく降りてきているんじゃないかなかったのか？

そんなことを思っているうちに、俺たちはコンビニに到着した。自動ドアが開き、来客時に流れる音楽と、やる気のないアルバイト店員の挨拶が重なる。そのなんでもない一連の出来事に、奏はさっきの寝ぼけた表情を一新し、目を見開いた。本当に人間界を知らないらしい。

ずらりと並ぶ食料品や雑誌、雑貨類。俺はパン、軽食コーナーへと向かう。初めて日本に来た外国人かのように、奏は店舗内をぐるぐると見まわしている。

『奏は何がいいんだ？』

店員に怪しまれないために、小さな声で話した。ただでさえよく利用するコンビニだ。既にあの店員とも何度か顔を合わせている。あまり目立った行動をしないと以降この店が利用できなくなってしまう。

「……」

見開いた目がさらに大きくなる。視線の先は、マヨネーズコーンパンとコロケパン。どちらも最近ではよく見かける普通の惣菜パンだ。天界人は普段何を食べているのだろうか。

そこからしばらく、奏は動かなかった。おそらく二つの惣菜パンで迷っているらしい。俺は仕方なく、その両方を手にとって清算に向かう。にわかには奏の表情が明るくなった。しかし、高校生のけなけなしの小遣いをはたいているということは、彼女には到底分かってもらえないだろう。

そして俺の部屋再び。さすがの俺も、起きてから何も食べていなかったのも腹が減った。

「ふー、メシがかなり遅くなったな。奏、さっそく食べようぜ」

中央のテーブルにコンビニの袋を置き、俺は内容物を出していく。俺が選んだのは、味より量の「どでかい焼きそばパン」。商品名の通りかなりどでかい。奏には先ほどの二種類のパンを置いてやる。彼女はさっきから、気持ち悪いほど機嫌が悪かった。今までこんな表情見たことがない。まあ平穏であるのは良いことだ。

さっそく袋を開けて食べようとする、そのどでかい焼きそばパンを、奏がまた目を見開いて見ている。さすがにこれは俺の食糧だ。お前には既に二つもやっただろう。

視線を極力無視して、俺は焼きそばパンを食べる。奏はずっとこちらを見ている。

「……ちよつとだけなら、やってもいいぞ」

その言葉に、また彼女の表情が明るくなった。こいつどれだけ食うつもりだよ。細い体のどこに入るのか。

結局、奏はマヨネーズパンとコロツケパン、それに俺のどでかい焼きそばパン2分の1を軽々と平らげた。しかも終始、彼女は俺に満足げな表情を見せていた。文明パワー恐るべし。人間の進化に俺は心から感謝した。予想外の出費は痛かったが、今回はその態度に免じて特別に許してやろう。

まあ近々、母親に小遣いの値上げを申請する必要があるけどな。

第10章…異文化交流

朝昼兼用の食事が終了し、特にすることもなくなった俺。いつもであれば、適当に小林などを誘って隣街にでも繰り出すのだが、どうしたものか。「今日は休み」と、先ほど宣言されたしな。一応礼儀として、聞いてみる。

「なあ奏、今日はこれから、予定あるのか？」

「……あたしをあんたみたいな暇人と一緒にしないで」

もう機嫌が平常に戻ったのか。パン効果は案外持ちが悪いな。そんなに期待もしていなかったが。

まあとにかく、奏は俺のように暇人ではないみたいだ。俺も、せっかくだから土曜日を謳歌したい。特にすることも無いが、外でぶらぶらしてみるか。

「じゃあ俺は隣街に行ってくる。奏は用事、あるんだろ？」

「え、う、うん」

何故か返事の歯切れが悪かった。俺は少し突っ込んでみる。

「仕事休みなのに大変だよな。何するんだ？」

「え、ええっと……。うーん、部屋の片付け、とか？」

さっきのは虚勢だったらしい。何だよ、お前も俺と一緒にじゃないか。しかしまあここで、奏に向かって「暇人」などとは口が裂けても言えないのだが。死亡フラグを敢えて立たせるような趣味はない。俺は、奏の無駄に高いプライドを逆なでしないように言った。こんな技術ばかり長けてくるのが少し悲しい。

「よかったら、お前も一緒に来ないか？ 一人で出歩くのもつまらないから」

「え、ほ、本当に……？」

何故俺がここで、全く利益を被らない嘘をつかなければならないのか。むしろ嘘をついた方が天使様にボコボコにされそうだ。

「街って言ってもそんなに栄えてる所じゃないけどな。それでもい

いのなら」

「い、行くっ!!」

奏は思わず立ち上がりそうになりながら、勢いよくそう返事した。隣街に何を求めているのか全然分からないが、何だかとても気合いが入っているようだ。まあ嫌々ついて来られるよりかは断然マシなので、天使様のこの無駄なハイテンションを俺は歓迎したい。

「じゃあ、さっそく行こうか？」

「あ、ま、待って！」

さつきコンビニに行くのに準備をしたのに、奏は少し時間をくれという。何をそんなに備える必要があるのか。ゲームでラスボス戦に挑む前でもここまで何度も準備しない。しかも、天使は一般人には見えないというのに。

まあ、特に俺も急いで隣街に行くような用事もないので、俺は再び階下で、くだらない土曜の昼番組を呆けた表情で見ていた。

数十分後。

年齢は若くない若手芸人が、ツツコミに困ったようでありあえず「なんでやねん」と大きな声で叫んでいる最中、奏様が階段から下りてくる音が聞こえた。やっと準備が終わったようだ。

奏が襖を開け、俺が居た部屋に入る。一つ伸びをして、俺は後ろを振り返った。
と。

俺はそこで、不覚にも固まってしまった。

色恋沙汰に疎く、三次元よりどちらかといえば平面上の女の子に恋をしているような高校二年生だと自負していたが、この不意打ち攻撃は誰だってクリティカルヒットを食らうだろうと思う。

奏は、俺の学校の女子生徒が着る、紺色ブレザーの制服を着ていたのだった。胸元には、赤い指定リボン、足元は、黒のハイソックス。そして、用意がいいことに今流行りの眼鏡までかけていた。事情を知らない人間から見たら、完全にうちの学生スタイルだった。

背後のテレビで再度、芸人が「なんでやねん」と叫んでいた。代弁者がとうよ、無名の新人。

俺が何も言えない状態で突っ立っているのを、奏は快く思わなかったらしい。少し頬を赤らめながら、ふいと向こうを向いてしまった。

「あ、あの、か、奏……」

「……変？」

「い、いやいやいや！ 変というか何というか、むしろそこらへんの現役女子高生より似合っているというか、てかそもそも姿見えないのにそんな格好する必要があるのかっていうか、何というか、つまりそんなところ」

動揺しすぎて何を言っているのか自分でも分かりにくい発言をしてしまった俺。無理もない、先ほどの攻撃で俺のHPは瀕死状態だったからな。奏は、そんな俺を察することなく依然向こうを向いたまま話す。

「今は人間にも私の姿を認知できるようにしてる。折角の休みだから、私だって人間の世界で遊びたいし。で、あんたと一緒に出かけるんだから、この格好が一番不自然じゃないって思ってた着替えた。あんたが嫌なら見えないようにする」

「そ、そんな、全然嫌だなんて思っていないしさ！ 似合ってると思うよ、それ」

「……じゃあこのままで行く」

若干照れた様子で、彼女はそう言った。

奏はさすが天使なだけあって、整った顔立ちをしている。俺が隣にいたら、それこそ世の中の人間男性諸君は目を疑うだろう。そして、「俺だって頑張れば何とかなるんだ」という全く無駄な希望を抱かせる結果となるのだろう。努力でなんとかなるのなら、もうとっくに俺には彼女の一人や二人、居たはずなんだがな。

しかし、何故に奏様はよりにもよって制服をチョイスしたのだろうか？ 恐る恐る聞いてみると、「このあたりの人間がよく着ている

から」という何とも平凡な答えをいただいた。俺は何を期待していたのだろうか。

ということで、俺は思わぬところでダメージを受けながらも、やっと出発することができたのだった。

電車を乗り継いで約三十分、最寄りの特急が止まらないため各停で隣街に向かう。

空を飛んでいけばすぐなのに、奏は頑なにそれを拒んだ。理由は今朝のくだりで御承知だと思うが、彼女は今、人間文明に大変興味をお持ちだからだ。俺は、こんなどこにでもあるローカル電車より魔法の翼の方が絶対すごいと思うけどな。環境適応というものは恐ろしい。

電車に乗っている間も、奏は車窓の風景に夢中だった。良い鉄子になれると思う。

そんなこんなで隣街。「街」という名で呼んでいるが、この場所も完全な繁華街ではない。お金と交通手段が限られている学生たちが、仕方なく土日にも練り出す程度の場所である。最低限の遊び場はそろえているが、「これだ」という決定打がなく、その結果中途半端な街並みと化してしまっている地方でよくある場所である。しかし、おのぼりさん全開の某天使は、目の中に星マークを輝かせ、五感すべてで感じる真新しい存在に対して逐一反応していた。

特に興味を示したのは「エスカレーター」だった。基本的に天界人は空を飛んで移動するため、多少の高低差は気にならない。よって、重力に支配されている俺たちが、上下運動をいかに少ないエネルギーで行うか苦心した後に完成した産物がとても面白いのだという。奏は上にあがって下に降りる、という行為を二回ほど繰り返した。三回目に差し掛かったところで人の視線がさすがに痛くなってきたのでやめさせた。

こんな調子で数時間。

さすがの俺でもそろそろ奏の対応に疲れてきた。

当の本人は、歩き通しであるにも関わらずまだまだ元気な様子である。どこからそんな力が湧いてくるのだろうか。俺は、暫しの休憩を希望するもあえなく却下を食らう。理不尽極まりない対応だ。労働基準は軽くオーバーしていると思うのに。

しかし、俺のHPがついに赤く表示されてしまう。ゲームの世界ではこの状態を「戦闘不能」または「しぼう」と言う。分かるか、動けなくなるんだぞ？ 教会行か一泊宿屋に泊まるかしないと回復しないんだぞ？

と、強制的に俺は動くことができなくなってしまったので、仕方なく奏は俺の休息を許可した。たかが隣街散策で、ここまで体力を奪われるとは思わなかった。

俺たちは、近くにあった公園のベンチに腰を下ろした。

土曜の夕方なので、周りにはカップルですよと言わんばかりの輩たちが有象無象だった。一見したら、俺たちもその中の一部と映るのかもしれないが、そう見られたところで俺にとっては何の役得もない。とりあえず、くだらないことを考える力も俺には残っちゃいなかったたので、何も言わずにベンチにだらりと腕を預け、夕焼け空を眺めていた。

そんな俺のことを、奏はしばらくぼーっと見ていたようだった。

俺自体、さっき奏が興味深々であった人間文化の一部と化しているらしい。

しばらくして一言、奏が何かつぶやいた。

「……キョウ」

「ん？ 何か言ったか？」

俺の質問に答えることなく、奏はふと、空を見やった。

夕焼けの空がだんだんと黒味を帯びていく途中だった。

「ちよっと、出かけてくる」

「え、今から？」

するといきなり、奏は自身に羽を背負わせた。そして、躊躇することなく、足を蹴って宙に浮く。

「すぐに帰ってくるから、ここで待ってて。用事、思い出した」

「何の用事だ？ だったら俺も一緒に……って、おい奏!!」

俺の台詞が終わるのを待たず、奏はそのまま中空に舞い上がり、どこかへと行ってしまった。俺は、まだ十分に体力が回復していなかったのもあり、その一連の様子を見ていることしかできなかった。「まったく、本当に勝手な天使様だよな……」

昨日今日の奏の行動で俺が理解できたことなんて一つもない。また勝手に何かしているのだろうと、俺は再びベンチにどっかと座り、休息に努めることにした。

奏の姿はすぐに見えなくなってしまった。猪突猛進という言葉は奏のためにある、と今更ながら思った。思い立ったらすぐ行動に移す彼女のバイタリティを、ほんの数パーセントでもいいから分けてほしいものだ。

俺は何もすることなくぼーっとする。いかん、非常に眠くなってきた。そういえば今日はかなり早い時間に起きたのだった。いつもだったら、とっくの昔に充電が切れている頃だ。奏が帰ってくるまで、少し仮眠でもとっておくか。

と、俺がその瞼を閉じようとした瞬間。

俺の視界の端に、何か変なものが映った。

たった一瞬だったが、とても不吉なものだったような、気がする。

いかんせんコンマ一秒程度のことだったから。

俺は都合の悪いものを、「考えない」という自己処理によって片付けようとしたのだが。

俺の動体視力の性能は優れていたようだ。
次の瞬間は、その不吉な影がはつきりと、俺の目の前に現れていた。

第11章..再戦

「……」

鏡を見ることができたのなら、俺は口を開けた状態で、何ともバカな表情をしていたんだと思う。

声は全く出なかった。できれば叫んで今の非常事態をアピールしたかったのだが、それはできなかった。

俺の目の前には、あいつがいた。

華麗なる魔法使いデビューを果たしたきっかけとなった、あの獣野郎が。

再び相まみえるとは思わなかった。

奴は、初めて出会ったときと同じく、血に飢えた形相でこちらを睨んでいる。

しかしこの状況、俺は圧倒的に不利ではないのか？

そう、今この場には魔物を成敗する黄門様、奏がいらっしゃらないのだ。

こんなときに、以前と同様仲間を呼ばれたりなんてしたら、俺一人で勝てる確率なんて銀行の利息より低くなりそうだ。

俺は奏を探すために、周りの様子をうかがった。

さっき飛び去って行ったばかりだが、もしかすると気配を感じて戻ってきてくれているかもしれない。

魔物が現れた瞬間は、地上の人々の時間は止まってしまうようだ。俺もその中に混じりたい。

動きを止めている人たちをかいぐり、視線をさまよわせるが、奏は……いない。

「っ!! 仕方ない、やってやろうじゃないか!!」

奏が戻ってくるのを待っている時間はない。こうやってじつとじていてもこちらがやられるだけだ。それなら先手必勝、やったもん勝ち。アドバンテージをとって、時間稼ぎをする戦法に俺は一縷の望みをかけた。

「燃え盛る、紅蓮の炎よ……」

と、俺は詠唱を始めた、しかし。

「ガルルッ!」

あろうことか獣野郎の方が先に、はぐれ○タルもびっくりするくらい俊敏な動きで俺を攻撃してきやがった。

「!!」

間一髪、俺は転がり込んで攻撃を回避した。

くそう、魔物には空気を読むということができないのか?ここは俺がかつこよく魔法を決める場面だろう。子供向けアニメでもヒーローの変身途中で攻撃するなんてことはないだろうに。卑怯な手法を純粋な子供に見せるなど、世の中のPTAが抗議にくるぞ。

とか何とかくだらないことを考える余裕はもろくなかったのだが、俺はやつとのこととで体制を建て直し、再び詠唱に入ろうとする、が。

「グアアアアッ!!」

「うわあっ!!」

獣野郎は尚も攻撃の手をやめない。本当にこいつ、何も分かっていない奴だ。このままでは、こちらが詠唱する時間が無い。

「くそっ!!」

俺はただただ攻撃を避けるばかり。

たまに受ける傷口からは、鮮血が流れる。土埃が舞い上がり、そこらへんに転がっている石で手足を切る。防戦一方と言いながらも、俺には確実にダメージが蓄積されていく。空気の読めない狼野郎は、余裕 しゃくしゃく 綽々といったところか、後足で耳の裏らへんを掻いていた。

これはかなりピンチである。「その後、彼らの姿を見ることはな

かった——」なんてテロップが出現しそうな雰囲気だ。こんな序盤で主人公が負けるなんて、ありえない展開だ。しかし、以前も言ったが、俺の人生にはリセットがきかないんだぞ？この命が途絶えれば、俺のぼうけんのしよは永遠に消え去ってしまうんだぞ？
そもそも、こんな時のために居る天使様は、今頃どこにいるんだ
よっ！！

俺は、耐えきれず、天を仰いだ。
聞こえるとか、聞こえないとか、そんなこと考えていなかった。
赤子が何かを訴えるとき、大声を上げて泣くのに同じように、声を張り上げて、一心にただ叫んだ。

「かなでーっ！っ！！ 助けてくれえーっ！っ！！！」

まったく……呼ぶのが遅いのよ！！

気がつくと、街の喧騒が元に戻っていた。
人々は、数十分前と同じように、のんびりとした土曜を過ごしていた。

俺は気を失っていたようだ。ベンチに横たわっていた体を起こす。
目の前には、奏が居た。

「か、奏……」

「魔物は倒した。あんた、私を呼ぶなら呼ぶでもっと早くしなさいよ。死にかけだったじゃないの。」

俺の体には、幾重にも包帯が巻かれていた。所々とれかけていたり、絡まっていたりするのを見ると、不器用な手つきで作業する天使様の様子が目に浮かんだ。

「シキがあたしのことを強く思ってくれば、どこに居てもあたしはシキのところに駆けつけることができる。先に言わなかったこっちの方が悪いけど、今度からもっと早く呼んでよね」

「……」

理不尽な天使様は、そう言って俺の隣に座った。あれだけ俺が苦戦した魔物を、奏はいとも簡単に倒したのだろう。制服は今日出かける前に見た時と同じ状態で、少しも乱れている様子はなかった。（包帯の糸くずが何ヶ所かにくっついていてしたことについては、彼女の名誉のために伏せておこうと思う）

そう言えば、用事は終わったのだろうか。とりあえず聞いてみる。

「あ、う、うん。まあ一応」

これ以上の質問は、奏から発する「聞くな」オーラを俺は敏感に察したので、深くつつこまないことにする。

まあ、とにかく。

俺は一命を取り留めたということだ。

安心したのと、これまでの疲労とが重なって、俺は一気に脱力した。

「……ありがとな」

だらりと腕を預けた姿勢のまま、聞こえないくらいのかすれた声で俺は言った。

奏は、何も言わずに立ち上がり、既に暗くなった空を見上げていた。

街の光で星は見えないはずなのに、きらりと光が瞬いた、気がした。

「やっぱり、シキを狙ってきたわね」

日曜日。

九死に一生を得た戦いを終えて、俺たちは家に帰ってきた。

その日はさすがに疲れ果てていたので、俺は家に着くなり即行布団に突っ伏した。横で奏が「腹減った」のだの何だの言っていた気がするが、記憶が定かではない。起きて早々頭が割れるように痛かったので、多分何か騒いでいたのは事実だろうと思う。

で、今に至る訳だが。

奏は起きてから、ずっと険しい表情でぶつぶつ何かを呟いている。俺が昨日飯を与えなかったことを根に持っているのだろうか。

「本来ならばクラジスを狙ってくるはず。なのに真っ先にシキに向かうなんて、どういうこと？」

「あ、あの、奏？」

一人脳内会議を続けている彼女に、一応声をかけてみたのだがあえなく撃沈。

ふん、いいさいいさ、どうせ俺は奏にとっちゃあ、足手まといのよく分からん一介の人間なんだ。高尚な天使様とお近づきになろうなんて、百万年早いってことよ。

『はあ……』

俺たちは互いにため息をついた。

第12章..おおよ

そして、そのまま幾日かが過ぎることとなる。

街で狼に襲われて以降、何故か攻撃の手はぴたりと止んでいた。

俺は、いつ襲われるか気が気でなく、正直学校なんか行く余裕はなかったのだが、

「駄目よ、ちゃんとガツコウとやらに行きなさい。いきなり普段の生活を変えてしまったら周りから不自然に思われるでしょ」

と至極真つ当なご意見を天使様から頂いたので、結局無意味な皆勤賞を続けることとなった。俺が学校に行っている間、奏はどうしているのか聞くと、

「あたしは調査で忙しいから。大丈夫、シキが呼んだらすぐに行く。一応、あんたもウィスメント使えるんだから、善戦はしてほしいところだけだね」

と、呼んでいいのか呼ばれたくないのかよく分からない回答をされた。まあ明らかに後者であることは、これまでの奏との付き合いから俺が学んだことである。

というわけで、俺は小林とたわいのない話をしながらも、いつ来るか分からない襲撃者に絶えず怯えるという、精神的にも過酷な生活を強いられたのだった。

「ああ、情けねえよなあ。俺だって、一応魔法使いだっていうのに、魔物一匹倒せないんだからなあ」

学校からの帰り道、俺は誰としゃべる訳でもなく一人ごちていた。最近、万が一襲われたことを考えて、こうやって一人で帰宅することが多くなった。

昔は、放課後に買い食いしたり家でゲームしたりと、まめに交友

を行っていたため、友人には事欠かなかった。今はそんな付き合いもなくなってしまったので、みんなとうの昔に俺の存在なんて忘れ去っているのだらうと思う。しかし、現在の俺の精神状態は、友達について考える余裕などは微塵もなかったので、下手に干渉されないという方が好都合であった。多分、後々困ってくるんだろが。気づいたら友達が小林しかいなかった、という最悪の状況だけは回避しなくてはならない。

そういう訳で、寂しさを紛らわすために無意味な独り言が増えてしまうのは、当然の摂理であった。

「考えてみれば、今まで退屈な日々を過ごしていたのに、いきなりRPGみたいなスキルを手に入れたんだ。傍から見れば、かなり愉快な設定だよなあ。まあ、傍から見ればの話なんだがなあ」

俺は、虚空にこのウィスメントと呼ばれる魔法の杖を振り回した。便利なことに、地上の人間にはこの怪しげな武器は見えないらしい。よって、俺は四六時中、体育の授業にでさえ、この杖を持参していた（体育の時は、紐をくくりつけ背負っていた）。悲しいかな、運動なんて最初から出来なかったので、こんな邪魔なものを背負った状態で授業を受けていても、誰も疑問に思うことはなかった。まあそのことについては、調度よかったととらえておこうと思う。近年は、ポジティブ思考でないと、生きるのがしんどくなる時が多い。すさんだ世の中になったものだ。

で、この杖なのだが、こうやって常に装備しているのにも関わらず、しばらく魔法を使う機会がなかった。

「ちょっと久しぶりに、魔法でも使ってみようかな」

いざというときになって、魔法が使えない状態になってしまったら意味がない。

訓練だと思って、空でも飛んでみよう、俺は目を閉じ、意識を集中させた。

「天駆ける力を我に！ フライ！！」

ブワァアッ！！

俺の背中に、以前と同じ真っ白な羽が生えた。魔法の腕は鈍って
いなかったらしい。しかし、このまま何事もなく魔法が使えなくな
り、魔物からも襲撃されなくなればいいのに、という希望を僅かな
がらも抱いていた俺としては、何とも複雑な心境であった。

考えていても気分が沈むだけであったので、そのまま俺は気晴ら
しに町内を飛び回ることにした。

とん、と地を蹴る。

それだけで、俺の体は宙に浮いた。

そのまま、俺は真上に飛び上がる。

家の軒先、電信柱、ビル……。あっという間にもうそこは、地上
の世界ではなくなった。

地上には、道があり、壁があり、山があり川がある。その度に人
々は回り道をしなければならぬ。そうやって、前に進んだと思え
ば後ろに戻ったりを繰り返す。空中には、そのような回り道は一
切必要ない。前方になにか障害物があれば、高度を上げれば済むこ
とだ。

天界人の寿命を詳しくは知らないが、生き急いでいる者は多いと
思う。実際、奏は娯楽を知らない。常に仕事が最優先で、地上の観
光もろくにしてこなかった。今の人間の生活だって、天界人とそん
なに変わらないのかもしれないが、少なくとも俺は、地上の道のよ
うに曲がりくねった人生を歩んでいきたいものだった。今は絶
賛回り道中だと思えば、少しは気が楽になる、かもしれない。

なんて柄にもなく哲学的なことを考えてしまうくらい、俺の神経

はやられちまっていたようだ。改めて前回の戦いのダメージが大きかったことを認識する。

しかし、空を飛ぶことは純粹に気持ちよかった。俺は風を切りながら宙を泳ぐ。全身に心地よい冷たさを感じる。そこらを飛び回っていたすずめと並走してみる。次々と雲に迫り、追い抜いていく。こんなことは、今までの俺には決して体験しえなかったことだ。

「命の危険に晒されているわけだが、まあ、これは不幸中の幸いってとこなのかな。今のうちに楽しんでおこうっと」

できるだけ暗いことを考えないようにしたいという本音を、誰も居ないのにも関わらず口に出さずに、俺はその後しばらく、空中遊泳を楽しんだ。

昔銭湯をやっていた名残の煙突。

少し疲れた俺は、その先端に腰掛け、何とはなしに風景を眺めていた。

こうやって空を飛んでいる間は、地上の者には姿が見えなくなる。本来ならば通報されるシチュエーションでも、これならば安全だ。都合のよい力だな、と改めて思う。

「これで、危険な輩が襲ってこなければ文句なしなんだけどなあ」魔法が使えるなんて、本当に愉快な設定だ。誰もが必ず、一度は夢見たと思う。しかし世の中は等価交換。何かを得れば何かを失う。俺は「平和な日常」を対価に「魔法の力と冷徹天使」を得た。何だか等価ではない気がするのは俺だけだろうか。

吐くだけ虚しいと思うが、既に数百回は吐いたため息を、俺はやっぱり吐かざるを得なかった。

と、その時。

「っ！！？」

背後に不穏な気配を感じた。

咄嗟に後ろを振り向くと、そこには何も居ない。

しかし、この気配。

忘れたくとも忘れさせてはくれない、奴のものに違いない。

「また、きやがったな……!!」

俺は空中に飛び上がり、気配から間合いを取る。

意識を集中させると、確かに、瞬間的に移動している何者かが居ることを感じ取れるが、依然、俺の目の前には何も映っていない。

数日前の出来事がフラッシュバックする。

脂汗がにじみ出る。

落ち着け、落ち着くんだ……!

俺は、動いている気配の軌道を追いながら、静かに詠唱を始めた。幸い、奴はまだ気づいていない。

先制を取れさえすれば、俺にだって勝機はある。一発喰らわせて、やればできるってところを奏に見せてやる!

「来たれっ天のいかずちっ!! サンダー……!!」

ズガー……ン!!

攻撃範囲を「広域」にセットした俺の攻撃は、見事に命中した。しかし威力が弱かったのだろう、完全に倒れるまでにはいかなかった。姿をあらわにしながらも、そいつは俺に向かってくる。くそっ、しぶとい奴め。

だが、ダメージが影響したのか、奴のスピードは格段に落ちていた。再びこちらに向かってくる前に、俺が詠唱する時間は十分にあった。

「これでとどめだ! ファイアー……っ!!」

ギヤアアアアッ!!

俺のファイアが魔物に炸裂する。クリティカルヒットだった。辺りに断末魔が響き渡る。内臓に響く、超音波のような叫びだった。

そのまま、奴はどす黒い煙を撒き散らしながら、姿を消した。後には、何も残っていなかった。

「はぁ、はぁ……」

魔物の気配は完全になくなった。

しかし、俺はしばらく、その場から動けなかった。

足が、今更震えてきた。変な汗が、全身をつたった。

俺は、杖を持っていた手を見る。

力強く握りすぎたせいで、手のひらは赤くなっていた。

やっとのことで、俺は煙突のところまで戻ってきた。

大きく、息を吸い込み、そのまま吐く。

胸の動悸が、少しずつ収まってきた。

「……った」

両腕をあげ、天を仰ぐ。ゆっくり、口を開いた。

「やった……やったぞーっ!!」

時間が経つにつれ、徐々に実感が湧いてきた。

俺は、勝ったんだ。奏が居ない、この状態で。頭の上には、レベルアップという大きな文字が浮かんでいることであろう。

相手は、取るに足らない小物だったと思う。奏なんか敵とも思わ

ない奴だったんだと思う。しかし、俺にとっては今まで精神を蝕んできた元凶だった。そいつのせいで、ずっと怯えながら過ごさなければならなかった。まだまだ、魔物はたくさんいるだろうし、俺が今倒した奴なんてスライム程度の弱い魔物だったのだろうが、この勝利は俺にとって大きな一歩だったことに変わりはない。

「俺だって……やれば、できるんだーっ!!」

今までのフラストレーションを全て発散するかのように、俺は煙突の上で叫んだ。

「貴方、すごいですわねっ！ 本当に一人で勝ってしまうんですから！」

「だろっ!? 俺だって、奏に頼らなくても戦えるん……」

え。

俺は誰としゃべっているんだ……?
ここに俺の姿が見える人なんて……

俺は驚いて、声がする方向へと向き直った。
と、そこには。

長い羽衣を体に纏い、優雅に宙を舞っている方がいらっしやった。

天使の羽はなく、彼女は羽衣で空を飛んでいるようだった。奏を天使というならば、彼女は天女ということだろう。凛々しさを感じさせる奏とは対照的に、柔和で非常に女性的な人だった。肩にかかる程の黒髪、丈の長い着物、おとぎ話の挿絵から飛び出したような、時代錯誤なお方だった。いきなりの登場に啞然とするしかない俺を見て、彼女はくすくすと笑っている。

「あ、あの、あなたは……?」

「ああ、すみません、怪しい者ではございませんわ」

怪しいものではない、なんて言う奴は大概怪しいものだ。ひとま

ず雰囲気からして敵ではなさそうであるが、俺は警戒するため一定の距離をとった。それを見て、天女さんは慌てる。

「ほ、本当ですよ！ 私^{わたくし}はゼーんぜんっ、怪しいものではございませんっ！」

と言いながら、天女さんは手を腰に当て胸を張る。そこは威張るところではない。

「で、怪しくないあなたは何者なんですか？」

直感的に、この部類はめんどくさい性格だ、と感じた俺は、手っ取り早く話を進めるために質問をする。天女さんは威張った格好のまま、続けた。

「私は水の守護、詩音^{しおん}と申します。奏とは同僚ですわ！ この度クレス様により、貴方様をお守りするよう仰せつかりました！」

「は、はあ」

天女、詩音さんは「全然怪しくないでしょ？」と付け加えながら、俺に握手を求めた。俺はなされるがまま、詩音さんにぶんぶんと手を振られる。しかし、俺がなおも怪訝な表情であるのを詩音さんは察したらしい。こほん、と咳払いをして、俺に向き直った。

「本当は、私、貴方様宅へ本日の朝伺う予定だったのです！ そうすれば、その時奏とも会えたでしょうから」

「……はあ」

「しかし、本当に貴方様が私たちと同様の力をお使いになるのか、私疑問に思ってしまったまして……今まで人間が力を使うなんて、聞いたことありませんでしたから。そこで、大変申し訳ございませんが、少し様子を見させていただいております。思えば、この行為が逆に、貴方様の不信感を招いたのですよね……」

非常に落胆しながら、おおよ、と詩音さんは着物の袖を顔に近づけた。ものすごく芝居がかっていると感じるのは俺の勘違いなのだろうか。なおも詩音さんは大舞台を続けた。

「でも、この目ではっきりと私は見ました！ 貴方様が魔物を倒す雄姿を！！ 私が抱いていた疑念など、とても矮小なものだったの

だと!! 私は今、恥ずかしくて貴方様に合わせる顔などございません……しかし、私はクレス様から命を授かった身。私は決めました、この命、尽き果てようとも貴方様をお守りするとっ!! このように卑猥な考えに及んだ私を律するためにも、全力で貴方様にお使いしよう!!」

紙吹雪が舞い飛び、抒情的な音楽が本当に響きそうだった。魔法の力で、それくらいはできないこともないんじゃないか、なんて考えたりもした。

俺には、完全にお芝居にしか見えなかった。しかし、当の本人はいたって真面目なようだった。再び俺の手をがっしと掴み、ぶんぶんと上下に振る。

「何なりとご命令くださいませ! 私は貴方様を、必ず魔の手からお守りいたしますっ!!」

「……はあ」

これはまた、やりにくい天界人が増えてしまったようだ。というか、まだこのお方が本当に味方なのかどうかも判明していない。しかし、詩音さんはそんなことそっちのけで、依然俺の手を振っていた。

とりあえず、家に帰って奏に見せれば、分かるだろう。

そろそろ痛くなってきた手をいつ放してもらおうかタイミングを図りながら、俺はこれからの生活に再び不安を感じずにはいられなかった。

第13章…三角関係

「……何で、あんたが居るわけ!？」

「何故私が居たらいけないのでしょうか？」

俺んち。

この狭い部屋に、天使と天女と俺が居る。そして、彼女たちは何故か険悪な雰囲気となり、どこに要因があったのか全く分からない言い争いをしている。あるえ？ 詩音さんと奏って、同僚じゃあなかったのか……？

「私はクレス様から志稀様をお守りするよう仰せつかりました。よって、志稀様のご自宅であるこの場所に伺ったのです。この、矛盾も全く何もない事柄に、何故あなたは疑問を持つのですか？」

「シキを守ることなんて、あたし一人で十分なの。それがなんでよりによって、あんたみたいな小言女がやってくるのよ!!！」

「こっ、こごとおんなですって……!？ 貴方は何という暴言を口にされるのですか?!?! 私がいっそのような言われようをされる行動をとりましたか?!！」

「いつって、毎回到決まってるじゃないのよ! 屁理屈ばかりくどくど言って、あんたとしゃべってるとイライラするのよ!!！」

あのー……。

「大体、あんたがいなくたって十分なんだって言ってるでしょ?! ここはただでさえ狭い部屋なのに、これ以上狭くしないでくれる!？」

「貴方みたいな野蛮な方に、志稀様をお任せしておけません!! 貴方こそ、天界へ帰ったらよろしいのでは!？ 元々乗り気ではなかったのでしょうか!？」

ダンッ!!

奏が傍にあったテーブルを思い切り叩く。詩音さんは一瞬怯みながらも、キッと奏を睨み返す。どちらも一歩も譲らない。

タイプのには真逆だな、と薄々感じてはいたのだが、ここまで激しい喧嘩が繰り広げられるとは思わなかった。どちらかといえば、奏が極端に詩音さんを嫌っているように見受けられるのだが、理由は俺が知る由もない。

そして、完全に蚊帳の外であった俺に、ついに火の粉（どころか火事大本）が飛んできた。

「シキ、あたし、気が変わった」

「え……？ な、何が……？」

「こんな女に任せるくらいなら、あたしがあんたを一人で守りきる。クレス様に早々に辞退させていただくよう申請してたけれど、撤廃する」

そ、そんな申請をしていたのか……新事実にかなりのショックを受けた。最近は奏ともうまくいっていたと思っただけに、そのダメージは大きかった。

そんな、軽い放心状態の俺の腕を、詩音さんはゆっさゆっさと引っ張る。

「志稀様は私がお守りいたしますっ!! 貴方は、新しい任務でもお受けになったらいいのですわっ!!」

これは、一体……

二人の天界人が俺を取り合うという奇跡が、目の前で繰り広げられている。

今までの過程をすっ飛ばして見ている人がいれば、俺は確実に、二股をかける最低な男として映っているのだろうが、これだけは声を大にして言いたい。「俺は全くの無実だ」と。今の争点は俺自身の取り合いでもないしな。

「とにかく、ここへはあたしが先に来たんだから、新入りの入って

くる余地はないわよ！ 出て行ってくれる！？」

「嫌ですっ！ そっちこそ天界へお帰りになったらよろしいこと！
！？」

二人は俺の狭い部屋で、大声を張り上げて言い争う。そこまで大きな声を出さなくても十分聞こえるのだが。むしろ近所迷惑なので止めてほしい。母親がまだ帰ってきていないことだけが幸いだった。二人は俺を間に挟み、なおも罵倒中だ。事態は悪化するばかりである。ここは俺が仲裁するしか……

「あ、あのーお二人方」

ぎろっと二人が俺をにらむ。蛇に睨まれた蛙ということわざを、使う日が来ようとは思わなかった。

しかし、ここで怯んではいけない。ここで負けたら男じゃない。俺は必死の決意で、続けた。

「俺にとったら、二人とも一緒に俺を守ってくれるなら、これほどうれしいことはないんだけど……あのー、やっぱ無理かなあ……？」
当たり前だというオーラが二人からにじみ出ている。

うーん、やっぱ、俺には無理だ。俺の決意の儚きことよ。二秒ももたなかったな。

と、その時、空から一筋の光が俺の部屋に差し込んできた。

これは、クレス様の光通信である。

以前も数回、唐突に通信があったことがあるのだが（ものすごく他愛もないことだったので、内容は忘れてしまった）、このタイミングで通信が入るとは。

『シキさん、シキさん、聞こえますか？』

「は、はい、クレス様、よく聞こえます」

俺は光に向かって答える。光通信なので、音声だけで姿は見えない。いわゆる電話みたいなものである。何度会話しても、姿が見えなくとも、クレス様と話すのは緊張する。

『今頃詩音があなたの元へ到着していると思いますが、そちらに詩音は居ますか？』

「はいっ、クレス様！ 私はここに居りますっ！！」

詩音さんが、勢いよく手を上げて答えた。姿は見えないだろうに、『おそらくそちらに奏も居ることでしょう。それで、今頃大変なことになっていると思いますして、シキさんにご連絡差し上げました』クレス様は絶対に、この状況を楽しんでいると思う。とぼつちりを受ける身にもなってほしい。

『まあ騒動の原因は言わずとも承知しておりますが、今日はまず、私から奏と詩音に、新たな命を授けたいのです。よろしいでしょうか？』

「はいっ、何なりとお申し付けくださいませ！！」

「……分かりました」

詩音さんは光に向かって恭しく頭を下げた。一方の奏は、軽く目を伏せただけだ。ここまで大きな態度に出られる奏は逆に尊敬に値する。

『命というのは簡単なことです。二人で、シキさんをお守りしなさい。それだけ』

……。

それだけ、って……。

二人は、何も言えずに固まっている。

『今回のことは、あなたたち二人にとっても良い機会です。クラスの一員であるのに、あなたたちはいつも言い争ってばかり。この機会に、少々二人にはチームワークというものを学んでほしいのです。現在は、あなたたち一人ひとりの力で魔物を退けられているかもしれませんが、今後そのような敵ばかりがやってくるとも限りません。シキさんと共に、力を合わせ、地上の均衡を守ってください』
「……」

クレス様の命なのに、二人は同意せず沈黙している。よっぽど仲が悪いのだろう。俺は、さりげなく俺自身も、地上を守るメンバー

に入れられていたことの方が気になった。

『なお、この命が受けられないようでしたら、二人には別の命を与えようと思っています。ですがそれは、ミッションβですのであしからず』

「え、えええっ!? クレス様、βだけはやめてくださいっ!!」

「それ以外ならばお受けいたしますっ!!」
「なので、βだけはお止めくださいませっ!!」

な、何なのだろう、ベータって……

二人は必死にミッションβを断っている。気になるが、絶対に聞かない方がよい気がする。

『分かりました。では先ほどの命、受けるということですね?』

「……分かりました」

「……畏まりました」

本当に渋々、二人は首を縦に振った。

『では最後にシキさん、二人をどうぞよろしくお願いいたしますねっ☆』

「は、はあ……」

でわり、というお気楽な声と共に、クレス通信は途切れた。

後に残されたのは、依然として険悪な雰囲気をもし出す二人の天界人と、それに怖気づくただの人間のみであった。

おそらく実際の時間であれば五分もかかっていないのだろうが。体感にして二、三時間は裕に越しているような感覚が俺を襲った。クレス通信が途絶えてから、今までの間。

沈黙の中で繰り広げられる各々の葛藤が、目に見えるようにはつきりと分かった。

……その均衡を破ったのは、意外にも奏であった。

「あんた、あたしの邪魔だけはしないでよ」

「わ、分かっていますわよっ！ そちらこそ、私の足手まといにはならないで下さいねっ！！」

冷たい横目で、奏は詩音さんを見た。

恐ろしさのあまりそのまま固まってしまいそうだったが、さすが詩音さん、応戦した。

しかし二人が言葉を交わしたのはそれっきりで、その日は冷戦状態のまま、彼女たちはそれぞれ俺の元から姿を消した。

こんな愉快な状況下。

奏一人だけでも大変だったのに、余計にひどくなっているのは何故だろう。

神様、仏様、クレス様、どうかしてくださいよ全く……

そんなこんなで次の日。

「おっはよーございますっ！！」

「！！！？」

テンションが計れるメーターがあるのなら、一発で振りきっていると思われる挨拶により、俺はノンレム睡眠から強引に覚醒させられた。

声の主は、奏ではありえない言動ということからしてあの人しかないだろう。

「おはようございます、詩音さん……朝っぱらから元気ですね」

「あら、志稀様、早起きは三文の徳と昔から言うではないですか！

さあさあ起きて、この眩い朝日まばゆを存分に体に浴びてくださいませ
「！！」

といい、詩音さんはカーテンを全開にし、無理やり俺を窓際に立たせた。

朝の神々しい光は俺にはきつすぎるようだ。逆にダメージを受けてしまった。

「あら、まだ眠たそうですわね。ではっ、朝の目覚ましがてらにパトロールに参りましょう！！」

「え、ぱと……？」

なんだその、とてつもなく面倒くさそうな響きしかない単語は。

詩音さんはそんなことをいつもやっているのか？

「はいっ、朝のパトロールは私たちの一日の始まりです。これは、クラジス業務規定の第3条に記載されている、立派なお仕事です！」

「そ、そうなんですか……」

いや、規定なんて俺知らねえし。

てか俺、クラジスじゃねえし。

そもそも、クラジスっていうものの説明さえ受けてないし。

「じゃあ、俺は足手まといになるので、やめときます」

「なにを仰いますか！ 私が志稀様のところへ参ったのも何かの縁です！ 縁を持った者同士は、どのような些細なことであっても関心を持って接したほうがよろしいですよ！」

「……」

ごめんなさい、詩音さん、全く意味が分かりません。詩音イズムを当然のごとく主張されても困ります。やる気なんかこれっぽっちも起こらない俺を完全においてけぼりにして、詩音さんは勝手に俺の身支度を手伝い始める。

今まで奏は俺のことを基本無視であったので、そのスタイルに若干慣れてしまった頃に全力介入してくるキャラが登場されては敵わない。しかし、この事なかれ主義である俺が不平不満を言える訳が無く、結局俺の貴重な睡眠時間は、きれいさっぱり消滅することに

なった。

「では、今日はこの二丁目当たりを散策致しましょう。大丈夫ですか、志稀様。何だかふらふらしていますわよ」

そう見えるなら、どうぞ遠慮なく俺を家に置いて行ってほしかったです。

そんな心の声は詩音さんには届く訳もなく、当の本人はさっさと業務を遂行していらっしやった。

「今日は天気も良いので、邪悪な気配もあまり感じられませんわねっ！ 魔物も良い心がけですわ！」

魔物の出現率も、この人にかかれば天気予報だ。当たらない確率の方が高いな。

どうでもいいが、眠すぎる。時計を見ると、朝のラジオ体操が生放送で聞ける時間帯だった。いつもギリギリ遅刻寸前の俺にとっちゃあ、今の時間はまだ夜だ。開いているかいけないかの狭い視野で、俺は何とか詩音さんの姿を追う。

と、そこに目を疑ってしまうような光景が俺の水晶体に映った。思わず瞼が全開した。

「あ、あれは……」

「ちゃんと、業務はこなしているようですね……」

俺が見たものは。

詩音さんと同様に街を見回り、時々小さな魔物に対して魔力を振るっている奏の姿であった。

何と言うか。

奏が真面目に業務を遂行しているところを見るのは初めてだったから。

その姿にひどく違和感を覚えてしまったのであるが。

やっぱり素直に、すごい、と思った。

今まで俺を助けてくれたことはあっても、「仕事」として働いている奏は見たことがなかった。忙しいとは言いながら、実際その姿を俺に見せたことはなかった。疑ったことはなかったけれど、こうして真面目に働いている奏は、やっぱり偉い天使なんだろうな、と漠然とした感想を抱いた。

奏は俺たちに気づくことなく、業務を行っている。

「ここで俺たちの姿を見たら、あいつ絶対嫌がるだろうな」

「奏に挨拶をして参りますわ。少しここでお待ちくださいませ」

って言ってる傍から詩音さん、何やってんすか！！

俺の制止を聞きもせず、詩音さんはさっさと奏がいる所へ行ってしまった。

その後の展開は言わずもがな。

顔を真っ赤にした天使様は、無実である俺にまでも、ショック死してしまいそうな罵声を浴びせ、さっさとどこかへ飛び去ってしまった。

火に油を注いだ当の本人は、自分が何故怒られたのかが納得いかず、一人でぷりぷりと怒っていらっしまった。

……二人の仲が最悪なのが、よく分かった朝の惨事であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6558j/>

カナデシキ。

2010年10月12日02時57分発行